

12) 下顎前歯部先天性欠損症例  
 —チタンメッシュを使用した垂直的・水平的骨造成—

○吉田 博志

(大通り吉田歯科医院(札幌市))

【諸言】インプラント治療は一般社会に広く認知され、欠損補綴のオプションのひとつとして臨床に取り入れられている。しかし欠損部の骨量が豊富な症例は少なく、さらに「患者主導」のミニマルインターベーションにより既存骨が残存する部位に利用する傾斜埋入、骨量の不足部位にはショートインプラント、ナローインプラントの使用が推奨されている。審美領域においてインプラント治療を予知性の高いものにするには、骨造成を施行し適切な方向、深度、そして臨在歯との適切な関係を保つことが重要な要素とされている。今回下顎前歯の先天性欠如により著しい頬舌的な歯槽堤の委縮に対して広範囲に水平的、垂直的骨造成を施行しインプラント埋入と残存歯の骨植の回復により保存し、補綴した症例を報告する。

【症例の概要】27歳女性で83, 42, 71, 32, 73動揺による咀嚼障害, 83, 71, 73残存による審美障害により受診する。既往歴としては7歳から14歳まで上下顎歯列弓の不調和、後続永久歯の欠如にて北海道大学歯学部付属病院矯正科及び内科受診。CT画像では前歯部歯槽骨が頬舌的に著しく委縮しており42, 32の支持骨も頬舌的に不足していて動揺度はⅡであった。下顎歯槽部頬舌的最小幅径は83:3.0mm, 425:1.5mm 41:0.5mm, 71:0.5mm, 32:2.5mm 73:3.5mmであった。上記によりインプラント埋入における初期固定が得られないと判断し、下顎枝からブロック状骨移植による骨造成を予定するも、患者からドナーサイトの同意が得られず骨補填材とチタンメッシュでの顎堤形成術を施行。

【考察】一般的に歯槽骨は歯を失うと消失することが知られている。本症例の様に中切歯、犬歯が先天性欠如していても乳歯が存在することで垂直的な骨の消失が少なかったと考えられる。しかし水平的に著しい歯槽骨の吸収がみられ、既存骨のインプラント埋入は不可能であった。本症例において①骨膜からの血液供給②術後の裂開の防止

を最重要とした。その対応としては、  
 ・唇側のコンケープでの歯肉を唇側に移動し、その範囲内での骨造成。

- ・舌側の骨膜弁の形成は最小限とする。
- ・切開は可及的に基底部を大きくする。
- ・チタンメッシュの使用（骨の委縮が著しい場合は骨からの血液供給はほとんどなく、骨膜のみの場合はメッシュ孔を通しての供給が重要）。

以上により、良好な結果が得られた。

さらに、今回の症例でブロック状骨を移植するベニアグラフトを施行しなかったことは、術部が1か所であり生体への侵襲、術後感染の減少、手術時間の短縮などで患者にも術者にも有効と考えられる。

【まとめ】・下顎前歯部の欠損部は頬舌的に骨が狭小化し、広範囲に骨造成を施行する必要がある場合が多い。今回骨造成を行ったことでインプラント治療が可能となり、更に残存歯も骨植の改善により保存が可能となった。

- ・広範囲に大きく湾曲した欠損部には形態付与後の変形が小さく、術後の固定が確実なチタンメッシュの応用が有効であった。